

合戦場の一里塚





合戦場の一里塚は関地区に完全な形で一基二対現存する。塩の道を往還する人々は、これを一つの目安として次の目的地を目指した。なお、「合戦場」は、天正年間に南部氏の家督を巡って起きた九戸政実と南部信直の争い、いわゆる「九戸の乱」に端を発する戦のうち、九戸方の久慈備前直治と南部方の葛巻信祐の両軍が相まみえた場所と言われている。



初夏を彩るツツジ

平庭高原内のつつじヶ丘では、6月頃に無数のツツジが咲き誇り、美しい景観を形成している。ウォーキングコースとしても人気が高い。

また、同時季には平庭高原つつじまつりが開催され、毎年恒例の行事として地域住民に親しまれている。

日本一の白樺美林

標高 1059.8m の平庭岳の中腹に位置する平庭高原には、369ha にも及ぶ範囲に約 31 万本の白樺の純林が広がり、国道 281 号線沿いに続く白樺群落は 4.5km で、群落面積、生育本数、群落距離、いずれも日本一である。平庭高原は、昭和 36 年（1961）5 月に岩手県立自然公園に指定されている。



経済基盤であつた木炭



大正2年（1913）に初めて販売を目的とした炭焼きが日野沢と戸呂町で始まったが、それ以前から、たたら製鉄に従事する者の中で盛んに行われており、山形村には炭焼きの長い歴史がある。



終戦直後の昭和22年（1947）には、実に584,000俵（9,063トン）の木炭生産量で日本一となり、村をあげて祝った。



製俵に用いるすご編みは、一般農家の女性たちの副業的な仕事でもあり小遣い稼ぎでもあった。



すご編みをする際に用いられていたすご編み台。

内陸と沿岸を繋ぐ塩の道



平庭キャンプ場脇にあるベゴ泊り場跡。塩などの物資を牛の背に載せ運搬する際に、塩の道を利用した牛方が牛とともに野宿していた。以前は小屋も建てられていた。



馬寄平地区で牛方の宿としての役割を果たしていた旧馬場家の板倉。塩蔵とも呼ばれ、交換した荷の一時保管にも使われた。

山形村の主要産業、畜産



短角牛基幹牧場（エリート牧場）での放牧風景。短角牛は「夏山冬里」方式で飼育され、夏の間は山で放牧される。



旧役場庁舎前（現在の新岩手農協山形支所倉庫前）で行われていた牛競り。

内間木洞



内間木洞及び洞内動物群は県の天然記念物に指定されている。また、冬場には、地面から天井に向かって氷の柱が伸びる氷筍が神秘的な空間を作り出す。



霜畑八幡宮



社殿両脇にそびえる大ケヤキは、昭和 55 年（1980）に県の天然記念物に指定。その二本のケヤキの樹齢は、一本は約 1,000 年、もう一本は約 800 年といわれている。